

J E C の源流と歴史的遺産 11

ミラード・J・エリクソン博士とJ E C

一宮基督教研究所 安黒務

エリクソン博士とJ E C

この一年、使徒的キリスト教からはじめて「キリスト教二千年の歴史的展開」をおおまかに概観してまいりました。今回と次回（最終回）は、「J E C の源流と歴史的遺産の集大成」とも言うべき組織神学書を著述し、また「私たちの時代における最も尊敬されるバプテストであり、福音主義の神学者であるⁱ」といわれるエリクソン博士とJ E C について考えてみたいと思います。

エバンジェリカルとしてのJ E C の神学の特徴

エバンジェリカル（福音派）としてのJ E C の神学は、源泉への姿勢、つまり**歴史的教理的ルーツ**とそれとの**連続性**を何よりも大切にすることを特色としています。このことは、具体的には、「**聖書に書いてあるとおり**」（コリント 15:3,4）をその展開の究極的原点とすることをはじめとして、公同信条に表明され、「**あらゆるところで**（公同性）、**常に**（古代性）、**すべてによって**（一致同意）信じられてきた」古代教会の正統信仰、16世紀**宗教改革**の神学、近世の福音主義**諸信条**、17世紀プロテスタント**正統主義**、ピューリタニズムを含む近代の**敬虔主義**と**信仰復興運動**との深い結びつきを常に意識しています。そしてさらにより近い歴史的ルーツとしては、…基本的に宗教改革の立場を強調していた19世紀中葉の英国プロテスタントの基本的反映と見られる前回記述しました**福音主義同盟**の9箇条ならびに**ローザンヌ誓約**を共通に認めていると表現することができますⁱⁱ。そして、このような基盤の上にたって、この50年の「十字架のメッセージ」や「聖霊経験への強調」がありました。

J E C の特質、それを組織神学のかたちで表現したとしたら

それでは、以上のような伝統に沿って、エバンジェリカル（福音派）としてのJ E C の神学はどのような**組織神学的位置づけ**ができるのでしょうか。19世紀後半から21世紀初頭までのエバンジェリカル（福音派）における神学研究を概観してみますと、欧米中心に**多くのすぐれた神学者**が活躍しています。また教派別にみますと、改革派系、聖公会系、バプテスト系、ルター派系、ウェスレアン系、ディスペンセーション主義系等の**多様な組織神学書**が出版されてきましたⁱⁱⁱ。それらの中で、日本の福音派の神学的重鎮のひ

とりであられる宇田進師が最も高く評価されている組織神学者のひとりが**エリクソン博士**であり、彼の主著「**キリスト教神学**」です。この書物は、今後 J E C、K B I を含め日本の福音派において教派を越えて「**基準的な組織神学書**」として用いられていくことが期待されています。それが「いのちのこ とば社」から出版されるゆえんです。

私の書齋にはかなりの数の「組織神学書」があります。そしてある時、K B I の高橋昭市師から「安黒先生、組織神学を教えてくださいませんか。」と言われましたとき、洋書でありましたが迷うことなくエリクソン博士の「キリスト教神学」を選びとりました。どのような組織神学書を使用するかで、その群れの**神学的特質が50年間規定される**と確信していたからでした。そしてその研究に没頭して今日まで導かれてきました。彼は私たちと同じく**スウェーデン・バプテストの流れをルーツとするクリスチャン**であり、**福音主義**と**バプテストの遺産**を忠実に**継承・深化・発展**させている神学者です。彼の主著「キリスト教神学」の至るところにみられる「**スウェーデン・バプテストの特質**」は、まさに「エバンジェリカル（福音派）としての**J E C の神学的特質**」を組織神学のかたちで表現したら、このようになるであろう。」と心底から納得させるものです。くすしくも J E C の教職者がその**翻訳**を受け持つことになったのも、また以下に紹介します「関西における二つの来日講演」の**受け皿**となりましたのも、あながち“偶然”ではなく、**神の摂理の御手のなす“必然”**、と言えるのかもしれない。

J E C 拡大教職者会：それは、J E C の “**空気**” にかたちを与える時

最初に、3月11日に西神・中国ブロックの教会が主催します「J E C 拡大教職者会」の意義・目的を説明させていただきます。

古代中国の戦争体験を集大成した**孫子の兵法書**には「**彼を知り己れを知れば百戦あやうからず**」とあります。J E C の特徴は「**十字架と聖霊**」という言葉で表現されます。しかしそれだけでは J E C の一部分を理解したにすぎません。J E C の宣教母国の教派的背景はスウェーデン・バプテスト系諸教会であり、私たち J E C は**スウェーデン・バプテストの特質**をあたかも“**空気**”のように無意識に継承しています。今 J E C は宣教50周年を節目に、**新たな50年の進路**を見渡しています。それゆえ、それらの**歴史的・教理的遺産**を正しく自覚しまた評価して**継承・深化・発展**させていくことが必要とされています。

まさに、そのような時に、**エリクソン博士**の主著『**キリスト教神学**』が出版されることとなり、またその出版を機会にご本人をお招きできることとな

りました。博士は「**教会への献身を伴って聖書的な主題を強調する神学は、バプテスタ的な主題を強調する神学を生み出す^{iv}**」と語っておられます。このことはJECの神学が福音派全体の共有しうる**共同的な神学的特質**を宿しており、日本の福音派の中で**穏健・中立・公平な座標軸的位置**にたちうることを意味しています。またそのことにより、日本の福音派の中でますますかけがいのない**貴重な群れ**となっていける可能性を秘めていると思います。私たちJECが、この神の時を生かし、さらに「**己(おの)れを知る**」機会とさせていただき、「エリクソンの神学をJECの神学の座標軸として」福音派の諸教派と連携を深め、**宣教と教会形成と神学教育**における共同戦線をより一層強化していくことができると願っています。

関西講演会（一般公開）：**あなたも神の創られる歴史の目撃者の一人に！**

第二に、3月12日にKBIで開催される「**関西講演会**」の意義・目的を説明させていただきます。

この関西講演会は、主の恵みにより「福音主義神学会・西部部会春の研究会」をいつもより一ヶ月繰り上げていただけることとなり、**福音主義神学会西部部会と関西聖書学院の共催**のかたちで開催されます。関西の福音派の神学校・大学の代表的な先生方が勢ぞろいされ、集会の奉仕を助けてくださいます。ひとりの神学者の講演に関西のみならず全国規模でこのような協力がみられるのは、あのピリー・グラハム大会以来かもしれません。集められる数では比べようもありませんが、**福音派の神学に将来にわたって与え続ける影響・質的内容**という点では、それをはるかに凌駕しているといっても過言ではないと思います。エリクソン博士は「**牧会者のハートと学者の知性をあわせもつ神学者^v**」と評され、その分かりやすい語り口は**世界的名スピーカー**としての評価の高い方です。それゆえ教職者のみでなく**信徒の方々にも有益な講演会**になると思われます。ある神学者は、「**組織神学書は電話帳を読むようにではなく、讚美歌を歌うようにさせなさい。**」とアドバイスしました。博士の「**キリスト教神学**」はまさに「**魂のこもった讚美歌**を賛美している^{vi}」かのように分かりやすく、しかも高度な内容です。米国では、福音派系キリスト教大学・神学校、そして教職者と信徒の方々の間で教派を超えて**基準的組織神学書**と高く評価されているものです^{vi}。

今回の講演会では、著者自身の口から、主著「キリスト教神学」における**問題意識**、そしてその**今日的意義**を語っていただきます。さらに聞くのみではなく、その価値を認め神学校の講義で用いている日本人教職者による「キリスト教神学」の本質をついた**レスポンス**と、さまざまの観点からの有意義な**ディスカッション**、そして**全体総括**へとひとつの流れとなって展開してい

きます。この講演会は「単なる講演会ではなく、日本の福音派の教職者が、そして信徒の方々が『キリスト教神学』を**どのように受けとめ、どのように活用していくべきかの21世紀の神学的指針**」を提供する場となることでしょう。ご期待ください、そしてあなたも参加し、神が創られようとしている**歴史の目撃者**となってください。

i D.S.ドッケリー編集「福音主義の思索における新しい次元」、『ミラード・J・エリクソン：教会のための神学者』、p.20

ii 熊澤義宣、野呂芳男編「総説 現代神学」日本基督教団出版局、1995、宇田進『現代福音派教会の神学』p.197

iii 前掲書、pp.198-205...戦前・戦後の福音派の著名な組織神学者と著作の解説。

iv 前掲書、p.21

v 前掲書『ミラード・J・エリクソン』の著作についての文献的エッセイ』、p.443

vi 前掲書、p.19